
現のゆめ 東京

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現のゆめ 東京

【Nコード】

N8798B

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

うつつのゆめ。現実をみた夢の先。あたしたちは今日も・・・

夜景の見えるレストラン

「二人で朝焼けを見に行ったなんて、すごいロマンチックじゃないですか！ その人、今何してるんですか？」

「うーん、よくわからない。風のうわさで結婚したって聞いた」

「え？ そうなんですか？ 先輩、あたしてつきり『今の彼氏だよ』って言うかと思いましたよ」

「ああ、それは期待させてごめんね？ でも別にあたしは今の彼が好きだから、今話したのは青春のいい思い出として心のアルバムに閉まってるの」

「なんだか、惜しいなあ。でも、今の彼、お金持ってるんですよね、うらやましい」

「菜奈？ 恋愛とお金は、別のもだよ？ あたしは彼が超貧乏の二ト君だって、気持ちが変わらなければ構わないよ」

「ええ？ 先輩、すごいんですね」

「…ごめん、やっぱり二トは嫌だ」

「はは、じゃあ、あたしの彼はだめだ」

「え？」

「もうね、あたしいないとだめなんですよ。完全なヒモです」

「でも好きなの？」

「ですねえ」

「菜奈のほうがすごいじゃないの」

「こういうのは、慣れですよ、慣れ。あたし、そーいう恋愛ばかりだったんで」

「月並みだけど、いつか素敵な出会いがあるよ。それにそれは今の彼かもしれないし」

「先輩が言つと説得力ある」

「でしょう？ あたしはね、経験してるの。壊れそうな恋愛とかね」

「…今話してくれた人ですか？」

「うん。今はもういい思い出になったけどね、あの後三年間くらい引きずってたな。なんであんなにいいムードで告白しなかったんだろ…、って思うとそればかり考えちゃって。ほんと、だめなやつだね」

「そーいうものですよ」

「まあ、そうやって、思ううちにあたしは今の彼に出会ったの。大學生で、予備校の先生だった。『合格したら付き合おう』って」

「それも十分素敵ですね」

「そうだね。だから、あたしは今の彼しか興味ない。たぶん、これからもずっと」

「…一つ、突っ込んでもいいですか？」

「うん？ なに？」

「薬指のソレは、その誓いの象徴ですか」

「うん。一昨日買ってもらった。えへへへ」

「いーなー、お金持ちー」

「へへへ。まあ、結婚はただけどねえーへへ」

「…先輩！ 飲みすぎじゃないですか？」

ある家の食卓

「…僕さ、ほんと好きだったかも、その人のこと」

「それは聞いてればわかるよ」

「でも、なんでだろう。いつの間に連絡取らなくなったし、若気の至りだったのかな」

「うーん…、難しいよ。でも勢いで人を好きになるような人があたしの夫なわけないと思うな。そしてあたしはその過去も、とにかく聞けてよかったとも思うし、だからさ、そんな顔したらいけないよ」

「穂奈美…。君と結婚できてよかった」

「はは、言うと思った。あたしもだよ、修ちゃん」

「だよね。…はい、にんじん」

「もう。ほんとににんじんくらい食べてよねー」

「まじいじゃん…」

「まったくもう」

「よし、ごちそうさま」

「ごちそうさま」

「そうだ！　…ねえ、今日はもうこのまま寝ちゃう？　明日休みだし、買い物したいって言ってたじゃん？」

「うーん、それじゃ、洗い物だけするね」

「えー。待てないよー」

「だーめ。汚れは一日置いとくと落ちなくなっちゃうのもあるんだから」

「あ、じゃあ、僕手伝ってあげる」

「どーも。でも、いいよ。修二、変なことするでしょ？」

「しないよ」

「…。どこ触ってるの！」

「冗談、冗談。あ、これ残りの食器ね。今日も美味しかったです。じゃあ、僕はシャワー浴びてこよっと」

「シャンプー、ちゃんと使ったら元の場所に戻してよー？」

「んー」

「…ほんとに子どもみたいなんだから」

「そんなことないよ」

「…まだいたの？」

「じゃ、行ってくる」

「いちいち触るなっ」

高層マンション57階

「入るよー？ 孝ー？…あれいなのかな？」

「風呂入ってるー」

「ああ、なんだ、びつくりした」

「入るー？」

「え？」

「ゆかりも、入る？」

「ううん。あたしは明日入るよ」

「んじゃあ、あと五分で出る」

「わかった。…あ、ねえ、ご飯食べた？」

「食べてないよ、何で？」

「今、明日の朝ご飯分、お買い物してきてついでにあれこれかったからさ」

「じゃあ、なにかお願い。あ、それと明日行かなくてよくなったんだ」

「えー！ じゃあ、意味ないじゃん」

「まあ、それならそれでどっかデートしよ?」

「花やしき!」

「お前、いつもいつも変わってんな」

「え? そう?」

「普通、デイズニールランドとか言わない? この前なんて高尾山って言ってなかった?」

「うーん、別にいいじゃんか」

「だってデートスポットって感じしないじゃん、古くて」

「勝手な偏見だよ。高尾山は確かに違うけど。でもまあ、愛があればどこでもデートだーって、なんか着てよ!」

「ごめん、ごめん」

「あー、冷めたーっ」

「じゃあ、花やしき行くのやめよっか」

「やだよ! …それで、今日はソース、ケチャップどっちかける?」

「オムレツ? じゃあ、ケチャップ」

「うん、わかった。よいしょっと」

「ああ、腹減ったー」

「何で食べてなかったの？」

「それ食べるため」

「ほんと？」

「うそ。なんか今日はめちゃ忙しかったんだよ」

「そっか、じゃあお疲れ様だね」

「そうだよ。…てか、お前ケチャップで花やしきって書くなよ。怖い」

「じゃあ、行く？」

「…うん」

「じゃあ、好き」

「ん？…俺も」

花やしき

「久しぶりだね」

「何が？」

「こうやってデートするのだよ」

「ああ、そっか。結婚してからは何回かしか行ってないもんね」

「そーだよ。修二、仕事仕事って、それも嬉しいけどさ」

「ごめん」

「その分、あれ乗るよ？」

「ええ！ いや、僕高いところとか苦手だし…」

「あたし一人にしないでよね」

「…じゃあ、一回だけだよ？」

「うん」

「あ、でもすごい列。待つ時間もったいないからやめよう」

「やめないよ」

「あー、怖い」

「大丈夫だつてば。あたしも怖いから」

「じゃあ、なおさら引き返そうよ」

「いや、怖いもの見たさみたいなの…怖いもの乗りたさ？　だよ」

「なんだか不思議なこと言うね」

「そんなことないよ。スリルを楽しむっていうことだよ」

「なんかそれはいやだな」

「え？　どうして？」

「暮らしにはりがないって聞こえた」

「被害妄想だよ」

「まさか、浮気とかしないですよ？」

「ばか」

「ごめん」

「ばか」

「…ごめん」

「二回乗ろっか」

「え！…あ、はい…」

「よろしい」

「でもさー、ほんとこれ、大丈夫か？」

「絶叫っていうか、古さが怖いらしいよ」

「どんなスリル？ ほら、あそこのカップルなんて彼氏、顔引きつってるよ」

「はは、弱虫だね」

「うーん…彼の気持ちはよくわかるなあ」

「全く、ほんと修二は弱いよね」

「君が強すぎる」

「バランスはいい」

「そういうこと」

「あ、キスしたよ。あのカップル」

「うつ、ほんとだ。…ってまさか？」

「冗談だよ。やだよ、こんなところで」

「あとでいっぱいしてやるよ」

「乗った後も同じと言える？」

「うーん……」

レストラン倉敷

「こんな隠れたお店があつたんだー」

「ああ、親父が浅草生まれでさ、たまに連れて来てもらったんだよね、ココ」

「あたしなんか、実家は港町でお魚は美味しかったけど、それ以外になーんにもないんだよね」

「はは、でもそーいう田舎もいいんじゃない？」

「あたしはこういうのに憧れてるなあ、下町とか、なんかいいよね」

「まあ、わからないこともないけどね」

「…それにしても、面白かったなー、花やしき」

「それにしても、怖かった」

「…頼りないなあ、孝、ずっと顔ひきつってたよ」

「いや、それは…だって、いきなりキスしてくるなよな」

「違うよ、あれはさ、少しでも安心させてあげようと思ったんだよ」

「ふうん。まあ、いつか」

「あ、そーだ。昨日ね、ほら、菜奈っているでしょ？ その子に彼

氏、羨ましいって言われた」

「何で？」

「お金持ちだからだよ」

「おお、まったく愛情がないね、ゆかりには」

「もう！ 違うよ、この話には続きがあんの！」

「え？」

「あたしはお金で決めてないよって言ったの」

「はは、それならありがとうだ」

「でしょう？」

「菜奈の彼氏はニートなんだってさあ」

「でも好きなんだ？」

「らしいよ、やっぱり愛ってすごいね」

「そーいうもんでしょ」

「そうなのかな」

「だってさ、お金は表現にすぎないんだって。なんていうの、ほら、どのくらい好き？ って聞かれてさ、言葉だと言い切れないじゃん

？ だからさ、こんな大金もはたいてやる、それを稼ぐ労力もお前のためならっていう行動ね」

「おおー語るね」

「愛はもつともつと大きな何か。それはタダで生まれてくる。二人がいればね」

「なるほどなるほど」

「…つーことでタダでかつ二人いればできることしようぜ？」

「え！ なに今のそのための前フリなの？」

「そ」

「ほんととは恥ずかしいんでしょ？」

「バレたか」

「顔真つ赤だよ」

「うわ、だせえ俺」

「かわいい」

「あほっ」

「へへへ。…ねえ、ここからならあたしの家が近いよ」

「じゃあ、そろそろ行くか」

「ごちそうさまです」

「お金で決めないんじゃないのかよ」

「今日は孝の番だよ」

「いつもじゃん」

「ごめん、ごめん」

「まったくもー」

浅草駅のホーム

「ねえ、そんなに具合悪いの？」

「え？ まさか顔色悪い？」

「うーん…っていうか、ジェットコースター乗ってからあんまり表情が動かなくなっただけ」

「ごめん…二回乗ったのはちょっと…」

「本当に？」

「なんで？」

「だってなんだか、こないだとおんなじ」

「ええ？」

「ほら、幼なじみの子のこと、話す前とおんなじ表情…秘密は作らないで？」

「うん…そっか、そうだね。ごめん。……ジェットコースター乗るときにさ、前にカップルいたじゃん？ あれがね、この季節になると思ひ出すっていうその幼なじみの人だったかもしれない」

「え、つまり、修二が好きだった人？」

「そう…。えっと、ごめんな…」

「うん。話してくれたほうが全然嬉しいよ」

「…なら、よかった」

「でも偶然であるもんだね」

「まさか東京にいるとは思わなかったよ」

「久しぶりに話、したかったんじゃないの？」

「…いや、この手はもう離さないよ。僕らはいつも一緒だからね」

「…修二」

「ま、むこうも彼氏いるなら話ずらいだろうしね」

「…ありがとう」

「いや…」

「ありがとう」

「うん…」

「…電車、遅いね」

「だね。…ああ、五分遅れてるみたいよ」

「あ、ほんと！ もう待ちくたびれたー」

「あと二、三分だよ」

「えいつ」

「う、なに？ いきなりどうしたのさ」

「暇つぶし」

「暇つぶしにこんなところでキスする？」

「だってよく考えたら今日まだしてなかったし…、それに…」

「それに？」

「さっきの、嬉しかった。『この手はもう離さない』って」

「そ、そっか」

「あ、修二顔真っ赤！」

「え？ あ、ほら、電車きたぞ？」

「それ逆方向だよ」

北千住にあるアパート

「起きて、ほら、起きろーっ」

「…うう…」

「ほら、もう二時だよ？」

「いや、まだ十時だ…」

「なに言ってるの！」

「その時計きつと左右が逆なんだ…」

「わけわかんないよ！ ほら、仕事に行きなさいっ」

「ふわあああー」

「早くしなきゃ。先生が遅刻なんてだめだよ？」

「あ、う…。そっか、ここゆかりん家じゃん」

「そうだよ。早く戻って着替えないと」

「あーあ、めんどくさー」

「あたしも今日は夕方に会社に顔出すから一緒にいこう？」

「…うん。じゃあ、とりあえず顔洗ってくるね」

「ん。お腹減ってる?」

「トースト二枚分入るくらいかな」

「わかった」

「あ、そういや、シェービングジェルあったっけか」

「あ、なかったかも…!」

「まじかよー、やっぱ不便だな」

「だね」

「ま、いいや。帰ってから剃るよ」

「ごめんね」

「うっん、ゆかりは悪くないよ」

「切れてんの忘れてたからさ」

「家に二個あるから、今度持ってくる」

「そっか。それで、なに塗る?」

「待って…。うっ、冷てー」

「あっ、ていうか、イチゴジャムとバターくらいしかないや」

「なーんだ。じゃあ、バターのみでいいや」

「りょーかい。あたしはジャム使おうつと」

「あ、待つて待つて。そのジャムどこで買った？」

「え？ って、ああもう、ちゃんと顔拭いてよね」

「悪い。で、どこの？」

「スーパーだけど？」

「なんだ、普通のやつか」

「ああ、孝、いちごの里のやつが食べたかったの？」

「そう」

「あれさあ、あたしけっこう前に食べちゃったんだよね」

「五、六個買つてなかった？」

「ああ、おとなりさんとか友だちとかにあげちゃった。あとお母さん」

「あーあ」

「孝んそこにはたしかまだあったよね」

「うん。一個半」

「まだそんなにあるんだ」

「たまに食べると格別なんだよ」

「おいしいものは毎日食べたくないの？」

「おいしいもの毎日食べると飽きるじゃん。量と好きは必ずしも比例しない」

「あーはいはいはい」

「ゆかりのキスみたいだね」

「へ？」

「シチュエーションが大事」

「はは、孝は恋愛の塾で先生やればいいのに」

「愛の方程式？ いや、さすがに気持ち悪いな…」

「…やっぱり孝はxとかyの方程式でいいよ」

「だな…っていうかジャムでいちごの里って書くなよ。怖い」

「気分でるか。…ねえ、仕事一段落したらまたいちごの里、行くね」

「うん。山を越えたらな」

埼京線上り

「穂奈美さ、大丈夫？」

「ん…、なんとか」

「別に一緒に来なくてもよかったのに」

「いやだよ、どうせあたし、池袋に用事があるんだからいいじゃないか」

「そうだけど、人が多いからさ」

「修二が守つてよね」

「なんかあつたら言えよ？」

「ありがと。…まだかな」

「まだ赤羽でたばかりじゃん」

「ははは、大変だあー」

「だよね。…あ、そうだ。今日の朝さ、なんか読んでなかった？」

「なんか？ ああ、赤ちゃんの名前のやつ？」

「あ、うん」

「ごめん、ごめん。別に…おつと…意味はないんだ。妄想」

「吊革届かないなら僕掴んでれば？でもびっくりしたよ」

「ありがと。だけどあたしね、海っていう字を入れたいなんて思ってるんだ」

「すごくいいね」

「でしょ？修二も絶対いいって言うと思った」

「海はいいよー、綺麗で雄大で」

「男の子でも女の子でもいいね」

「うん」

「海斗くんとかね、海波ちゃんとかたくさんあったよ」

「僕は海だけでもいいと思うなあ」

「ああ、それもあるかも」

「でも海斗もいいなあ」

「…ほんとにできたら大変だね」

「それまでに絞っておかなきゃだ」

「幸せな悩みだよな」

「まあ、満員電車で話しているとクールダウンだけど」

「そお？ ほら、窓からあんなに綺麗な朝日が見えてるよ？」

「あ、本当だ。…まぶしいね」

「うん。すごい温かいね」

「…そうだね。あ、太洋って名前、いいかも。太平洋の太洋」

「太陽と海？」

「そう」

「じゃあ、男の子ならね」

「うん」

「意外とすぐに決まったね」

「だね」

「うわっ」

「どしたの？」

「今、幸せって、急に思った」

「なんだそりゃ」

夕暮れ時の会議室

「…あーあ、こういうのって、あたしたちがやらなきゃなんですか？」

「うーん。ほんとに面倒だね。あたしたちはこんなことするために…って思っちゃう」

「だいたい、こんな時間から会議って何を考えてるんだか」

「まあ、しょーがないんだけどねえ」

「…あ、その資料はもう置いときましたよ」

「ああ、ごめん、ごめん」

「って、先輩。なにやってるんですか」

「ちょっと、ここの眺めっていいなってね」

「あー。主任の席ですか？」

「そう。菜奈も座ってみたら？」

「遠慮します」

「なーんでよ。まだ時間はあるよ？」

「いいですって」

「ちえっ。それじゃあ、せめて、もうちょっとここにいよう?」

「…どーしたんですか? 先輩らしくない」

「だってさ、あたし、今日はただ資料の整理とかしに來ただけなのにさ、主任の目に留まったからって…」

「じゃあ、ぱっぱと終わらせて帰ればいいんじゃないですか?」

「…そうもいかないの。あのね、菜奈、あたしはあなたに話があるわけよ」

「え? なんですか、改まっちゃって」

「昨日ね、彼とデートに行ったわけ。そこでね、もしかしたらなんだけど…この前の人を見た…」

「この前の人? …もしかして、先輩と一緒に朝日を見に行った?」

「うん。たぶん、違うと思うけど、なんかそうかもしれない」

「どっちですか? っていうか、大丈夫ですか?」

「なんかよくわかんないよ。埼玉に越したから、どうなんだろ? でも、あたしも上京したし、東京にいてもおかしくないよね?」

「うーん。そうですねえ」

「じゃあ、やっぱり、本人なのかな…」

「先輩は、彼といたんですよね？」

「そうだよ」

「じゃあ、話しかけにくいですね」

「向こうも奥さんみたいな人と一緒だった。子どもはいないみたいだったけどね」

「あ、っていうか、それ彼には言っていないんですか？」

「うん。なんとなく、言いづらいんだ。ちょっとはその人のこと、話したりしたけどね」

「じゃあ、逢っちゃえばいいじゃないですか」

「内緒で？」

「それは…もし、先輩がちょっとでも不安だったり、やっぱり気が引けるなら話すべきだと思います」

「なんだか、今日の菜奈はいつも以上にはつきりしてるね」

「なんだか、ちょっと嬉しかったりもするんですよ、先輩が悩んでると。いや、悪い意味じゃなくて、そうすればあたしに頼ってくれるじゃないですか、それってあたしが必要ってことですよ。それがなんか、嬉しいですよ…って、ごめんなさい」

「いつも先輩って言うてくれてるけどさ、菜奈はけっこう頼りにな

るんだね」

「ええ？　そうですか？　だったら嬉しいです」

「そーだよ。仕事も心もしっかりしてるよ。菜奈に相談してよかったな」

「へへ、それじゃあ、戻りましょうか」

「うん、やっと帰れるよ」

「またいつでも言ってくださいね」

「うん、ありがとう」

赤羽台公園

「え！？ 穂奈美、今なんて言ってたっけ？」

「日本語、おかしくない？」

「え、だって…」

「あのね、池袋に今日行ったのは、そこに知り合いの先生がやってる産婦人科があるからなの」

「うん。それはわかったけど」

「それでね、今日、調べてもらったらね、二ヶ月だって…」

「…真面目？」

「うん」

「ジェットコースターとか、乗っちゃったじゃん！」

「うん、だねえ…。でも、影響ないって」

「うすうす、気づいてたの？」

「だって、ほら、全然こなかったし、もしかしたらって。だからあたし嘘ついてた。子どもの名前考えてたのは妄想じゃないよ」

「男の子？ 女の子？」

「まだわかんない。でもあたしたちの子」

「どうしよう」

「ええ？」

「僕、父親？」

「だね、あたし母親」

「どうしよう」

「じゃあ、まず落ち着こうよ」

「だけどき、だって、僕がだよ？ 父親だよ？ 穂奈美は驚かないの？」

「だって、心当たり、ありありじゃんか。それに興奮したら胎教に悪いよ」

「胎教かあ……」

「ふふ、そうやって、子供の子と考えることが、父親だと思うよ」

「でもさー、やっぱり驚いちゃうよ。そりゃあ、当然いつかはって思ってたけど、まさか、ねえ」

「本当だよな。あたしだって本当はどきどきだったけど、それじゃだめだと思ってさ」

「母親…だね」

「うん。でも大丈夫かなあ？」

「なにが？」

「いろいろ」

「僕がなんだってしてやるよ、父親として、夫として」

「じゃあさ、手、繋いで帰ろう？」

「恥ずかしい」

「たった今、なんだってするって言ったじゃん！」

「そーだけどさ」

「自分の言動に責任持つこと！ ほら、行くよっ」

荒川河川敷

「え？ 孝、今なんて言っ たっけ」

「聞こえてないのー？」

「ちょっと電波悪くてさあ」

「だから、俺たち、一緒に住もうって…あー、もう超恥ずかしいよ、二度言っ とか…」

「はは、ごめんね。本当は聞こえてたんだけどさ、嬉しくて、つい」

「うわー、ひどい」

「でもそういうことはさ、電話で言わ ない？」

「思い立ったときに言わなきゃ、と思っ て。だけど、これからは仕事 中でもない限りは一緒だから…」

「うはは、そだね。…孝、顔赤いでしょ？」

「かもしない。だけど、ゆかり、うははっ てそれ、女の子の笑い方 じゃないって」

「なんか、嬉しすぎた。いいじゃん？ 周りに今、なーんにもないし」

「どこにいるの？」

「荒川の河川敷！ ほら、金八先生のとこ」

「ああ、そこね。好きだなー」

「たぶんね、あたしは根っからの田舎もんなんだね」

「そーなのかな？」

「草の匂いとか、水の跳ねる音とかね、落ち着くんですよ」

「俺だって下町育ちだけど、そうだよ」

「ほんとう？」

「うん。やっぱり人間って動物だなーって思う」

「動物かあ。そうなのかな」

「え？ 違う？」

「ほら、やっぱり人間には感情があつて、特別だから『望む』って
ことができるわけであ…って、難しいよね」

「そついうのは確かに人間ならではの、だよね」

「でしょう？ だから、うん…。あれ、何が言いたかったんだろう、
あたし？」

「つまり、俺は…」

「ん？」

「俺はさ、まあゆかりが喜んでればそれでいいかなって」

「難しいもんね。大丈夫だよ、あたしすごく嬉しい。これまで長かったー」

「出会って、もう何年？　うわ、本当に長かったな」

「高校生だったんだよ、あたしは。一、二、三……え！　もう七年じゃない？」

「やつと同棲って、俺らすごいな」

「結婚は三十歳になってからかな？」

「はは、それはどうかなー？」

「待ってるからね？」

「ん？」

「待ってるからね、先生？」

「あ、うん。大丈夫。待つとけよ」

「うん」

お昼休みの社員食堂

「おい、おいおいおい」

「なんだよ？」

「それは本当？」

「ああ、そう。ほんと。昨日確かに聞いたんだってさ」

「じゃあ、お前親父さんか！」

「そういうこと」

「修二、お前ってすごいな」

「んん？」

「奥さん、大学時代からの同級生だろ」

「そーだねえ」

「そうやって人は生きていくんだな」

「そんなに遠い目しないでも…」

「でも、ほんと、よかったなー」

「問題は山積みだよ」

「ん？ そうなの？ 名前は大地でいいぜ」

「ばか。ほら、お前、昨日、今日に自分の遺伝子受け継いだ子どもができるって聞いても実感わかないだろう？ なんていうか、それが、得体の知れないなにかに気づけてないようで、すごく怖かったりもする」

「それはたぶん、すごい幸せな悩みだと思うけどな」

「そーなのかなあ」

「責任はすげえけど、正真正銘、修二たちの愛の結晶なんだから、なにも怖がることはないと思うぜ」

「いいこと言う」

「お前の今の愛の気持ちを絶やさなければそれでいいっていうか」

「ふはは」

「なんだよ」

「それ、お前はちゃんと優梨子ちゃんに伝えたらいいのに」

「余計なお世話だよ。俺らはまださ……あ、そうだ、修二はなんで結婚しようと思ったの？」

「まだ、なんだよ」

「いや、まだまだ気持ちが落ち着かない。そりゃ、愛はあるけど、なかなか覚悟できなくてな、お互いに」

「僕らはそうだな、覚悟とか、そんなんじゃないかな。好きがすごく好き、大好き、になって、ああ、もうこりゃ結婚するしかないなって。ずいぶん、頭悪いけどさ」

「はは、お前らしいよ」

「だろう？ たぶん、繋げるじゃなくて、繋がる。勝手に繋がってるんだ」

「やっぱりすごいな。お父さん」

「ばーか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8798b/>

現のゆめ 東京

2011年1月9日04時10分発行